

## マックチキンと、入っていなかったポテト

その日は仕事が長引き、家に着く頃にはすっかり夜になっていた。冷蔵庫を開ける気力もなく、私は、帰り道にあるマクドナルドのドライブスルーに立ち寄った。注文したのは、ハンバーガー数個に、子どもが好きなマックチキン、そして「今日は疲れたから」とLサイズのポテト。紙袋を受け取ったとき、揚げ物の匂いに、ようやく一日の終わりを感じた。

家に帰って、家族でテーブルを囲んで袋を開けた瞬間、妻がぼつりと言った。「ポテト、ないよね?」。袋の中をもう一度確認したが、見当たらない。私の頭をよぎったのは、「注文し忘れたかもしれない」という不安だった。だが、スマートフォンの注文履歴を見ると、確かにポテトLの記載がある。代金も支払っている。

「ちょっと行ってくるよ」。冷めかけたマックチキンを前に、私は再び車に乗った。正直なところ、面倒な気持ちになかったわけではない。だが、子どもが楽しみにしていたポテトを思い出すと、そのままにする気にはなれなかった。

店に着き、レジで事情を説明すると、対応してくれた若い店員はすぐに「申し訳ございません」と頭を下げた。そしてレシートを確認し、「こちらの入れ忘れです」とはっきり言った。言い訳も、曖昧な説明もなかった。「少々お待ちください」。数分後、店員は新しいポテトをトレーに乗せて戻ってきた。「お待たせしました。こちらがポテトです。ご迷惑をおかけして真に申し訳ありませんでした」。そう言って、さらにマックチキンを一つ添えて差し出した。「こちらはお詫びの気持ちです」。その対応は、決して大げさではなかった。だが、過不足のない言葉と態度には、責任をきちんと引き受ける姿勢が感じられた。私は「ありがとうございます」とだけ言い、店を後にした。

家に帰ると、子どもは大喜びでポテトに手を伸ばした。妻は、「ちゃんと対応してくれるんだね」と感心したように言った。私は、店でのやり取りを思い返ししながら、ただ商品を受け取っただけではない何かが心に残っていることに気づいた。

間違いは、どこでも起こり得る。だが、その後どう向き合うかで、相手の印象も、自分自身の気持ちも変わる。

少し冷めたマックチキンをかじりながら、私は仕事においても同じことが言えるのではないかと、自然に考えていた。その日のポテトは、いつもより少しだけ温かく、そして印象深い味がした。